



「最近、どんな絵の具をどれくらい混ぜれば、こんな色が——という『暗算』ができるようになりました」(横浜市内の自宅で)＝青山謙太郎撮影



エッセイスト

森下 典子さん

「描くのは、こういう色の食べ物を多く描いているからでしょうね」
両手に収まる和紙に筆で描いていくのは、食べ物だ。インスタントラーメンは「湯気が出ている数

◆…もりした・のりこ…◆
1956年、神奈川県生まれ。著書に「典奴どすえ」「日々是好日」など。食品加工機メーカー「カジワラ」のホームページ (<http://www.kajiwara.co.jp/saella/>) で連載中のエッセーをもとにした「いとしいたべもの」(世界文化社)は4月に刊行。

色合い工夫 気分転換

描く。
40代の初めから数年間、花の墨彩画を習った経験はあるものの、食べ物を描くのは初めてだった。食べ物の軟らかさや、おいしそうな雰囲気などを表現するか、色の使い方に工夫を凝らした。

連載で描いた作品はすでに40以上。最近仕事以外でも、筆を手にするようになった。庭先のサボテンやクンシランが花を咲かせると、じっくり観察して特徴をつかみ、2、3時間で一気に仕上げる。「余計なことは頭の外に追いやり、気分転換できる。これは、30年来続けている茶道に通じます。普段着のままでも気持ちを切り替えられる方法が見

群緑、紅梅、鮮光黄……。『顔彩』と呼ばれる日本画用の絵の具をテーブルの上に広げた。50種類はあるだろう。水彩絵の具でおなじみの青、赤、黄……と微妙に違う色合いは、その名前と同じような味わいがある。

「茶やクリーム系が先になく、分間」というように、一番おいしいような場面を狙って筆を動かす。4年前から月一回、食品加工機メーカーのホームページで、食べ物に関するエッセーを書いてい

る。そこで、「挿絵も」と頼まれたことが、イラストの魅力を知りきっかけに。水ようかん、固形乳などで作るカレールイス、メロンパンなど、思い出深い食べ物を筆で

一部とはいえ、仕事の緊張をほぐしてくれただという。「素人っぽさがいいから、このままうまくならないで、という困った注文も寄せられるんですよ」

旅などをテーマに、読みの心を和ませる軽妙な文体で知られる。自ら感じた楽しさを、読み手にも追体験してもらおうと考えてきた。「記憶の海の底に、だれしもが持っている幸せな思い出。それにスイッチを入れるのが私のエッセーの役割かなと思っています」。絵の具たちは、その手伝いをしていてくれた。

(室靖治)